ともに　to mo ni
共生社会へ
未来をつくる SDGs

注目の団体

# 七五三を誰にでも

## NPO法人「きもの縁プレイス」

七五三は子どもの成長と幸せを願う伝統行事。けれども子どもに重度の障害があり、神社や寺に参拝するのが困難だとしたら――。

NPO法人「きもの縁プレイス」は、障害のある子どものための「七五三プロデュース」を手がける。「すべての子どもが平等に『晴れの日』を迎えるためのお手伝い」と代表理事の澤山綾子さん(51)は言う。

秋分の日の9月23日、東京で少し早めの七五三のお祝いがあった。長期にわたるけいれんで運動障害などを引き起こす国指定の難病「難治頻回部分発作重積型急性脳炎」を患う竹内菜夏さん(7)が、両親や祖父母らに見守られながら、加持祈とうを受けた。菜夏さんがまとう晴れ着は、母沙代子さん(37)が7歳のときに着たものだ。

「祖母が準備してくれた着物。人工呼吸器を付けるなど医療的ケアが必要なので、着物を着るのも寺社に行くのも難しいと思っていた」と沙代子さんは話す。訪問看護師を通じて縁プレイスの存在を知った。

菜夏さんの着付けと祈とうは、澤山さんが行った。商社勤務などを経て家業を継ぎ、東京で呉服店と着付け教室を経営。「その傍ら『密教の奥深さを知りたい』と真言宗の寺で得度し、祭祀の手法も伝授された。

着物を通じて「障害のある子どもたちの支援を」と昨秋、縁プレイスを設立。小児科医や訪問看護師、僧侶ら約30人がメンバーに加わった。「この取り組みを全国に広げたい」と力を込める。「命が輝く機会にあふれる世の中にする」ことが目標だ。【明珍美紀、写真も】

ベッドに横たわる竹内菜夏さんに着付けをする澤山綾子さん(左)。着物姿の娘を母沙代子さんが見守る＝東京都内で9月23日

インフォメーション

## ごみ袋に「MOTTAINAI」

### 500万枚に標語印刷 4万世帯利用

埼玉県秩父市など5市町でつくる秩父広域市町村圏組合主催の「ごみの減量化とリサイクル」に関する標語コンクールで、「『MOTTAINAI』　わたしもできる　SDGs」が最優秀賞に選ばれた。来年度、圏内で販売される「有料指定ごみ袋」約500万枚に印刷され、約4万世帯が利用する。

コンクールは今年で28回目。圏内の小学4年生を対象に6月から3カ月間募集した。23校から665件の応募があり、最優秀賞に秩父市立大田小学校の冨田花和さんの作品が選ばれた＝写真・秩父広域市町村圏組合提供。冨田さんは「標語を見た人がMOTTAINAIという言葉に注目し、物を大切にしたり、ごみを減らしたりすることを少しでも考えてもらえたらとの思いで作りました。一生懸命考えたので、選ばれてとてもうれしかったです」と話している。

同組合は「MOTTAINAI」の商標権を持つ毎日新聞社に商標使用料を支払い、同社MOTTAINAIキャンペーン事務局はキャンペーン提唱者の故ワンガリ・マータイさんが始めたケニアの植林活動に寄付金として送金することにしている。

「ともに」の特設サイトはhttps://mainichi.jp/tomoni/

# 笑顔もらえる「週末里親」

「週末里親」をご存じだろうか。養育困難な家庭や虐待などの理由から親元を離れ児童養護施設で暮らす子どもらを、週末や休み期間に預かる制度だ。俳優の佐藤浩市さんはその制度の一つ、東京都の「フレンドホーム」事業に5年にわたり妻と一緒に取り組んできた。佐藤さんに週末里親として子どもと過ごした経験や、里親制度への思いなどについて語ってもらった。【聞き手・桐野耕一】

## 俳優　佐藤浩市さん

＝竹内紀臣撮影

さとう・こういち　1960年生まれ。東京都出身。19歳で俳優デビューし、82年に映画「青春の門」で日本アカデミー賞新人俳優賞を受賞。95年に「忠臣蔵外伝　四谷怪談」、2017年に「64―ロクヨン―前編」で同賞の最優秀主演男優賞を受賞した。

――フレンドホームの事業に取り組むきっかけは何ですか。

◆妻が児童養護施設の子どもたちとふれ合うボランティア活動をしていて、施設になじめず自室に引きこもりがちな10代の女の子を家で預かれないかと相談を受けました。施設と異なる家庭的な雰囲気に触れることで、女の子に少しでも元気になってもらえればと。「里親」と聞くと責任が非常に重いのではと感じたのですが、「フレンドホーム」のように週末などにだけ預かるスタイルもあると聞き、子どもの役に立つのであればやってみようと、2018年から始めました。

僕は週末仕事で家にいない場合もあるし、彼女も学校の活動などで来られない場合もあります。互いに予定が合う中で家に来てもらい、一緒に買い物に行ったり、食事をしたり。正月に長い間泊まってもらい、遊びに行ったりもしました。

彼女は当初、消え入るような小さな声でしか話せず、これまでいろんなことがあったのだろうと感じました。だからといって気を使って声をかけるようなことはせず、できるだけ自然な立ち振る舞いをする中で見守り、少しでも互いの距離感が近づいていけばいいなと考えました。

――取り組みを続ける中で印象に残ること、うれしかったことは何ですか。

◆彼女がはっきりとした声を出せるようになったこと。そして、作ったような笑顔ではない自然な笑顔を僕たちに見せるようになったことです。2年近くかかりました。彼女が髪を切ってきて、「似合うね」と声をかけると、うれしそうな顔をした。ただそれだけのことなんですが、その笑顔を見て本当にうれしく思いました。

彼女はつい最近、施設を退所しました。今は退所した子どもらを対象にした国の支援を受けて生活しています。退所後も僕たち夫婦と付き合いが続いており、過剰になりすぎない、いい距離感をとりながら彼女の自立をサポートしていきたいと思っています。

## イメージ変える努力を

――映画の撮影現場にも連れていったことがあると聞きました。

◆彼女に加え、妻の活動を通じてかかわりを持った児童養護施設を退所した子どもたちを連れて行きました。監督やプロデューサーが「こういう仕事があるんだよ」と案内してくれて。撮影現場に連れていった子どもの中には、その体験を通じて俳優を目指している子もいます。

施設の子どもたちは、つらい経験をして傷ついているからこそ、つらい顔を見せまいとする子が少なくありません。街で普段よく見かける子どもたちよりも、大人に対して愛想がいい。それだけに、その姿を見ると僕は余計つらく感じるし、いとおしくなります。

フレンドホームの活動を通じて、子どもにプラスになることが一番重要なのですが、僕にもプラスの面があったと思います。昭和世代ということもあり、息子への子育てでは、きつく言うこともありました。少し厳しすぎたかもしれないと思い返し、預かる子どもにはそうではない接し方をしたいと考えるようになりました。妻からは「子どもを預かるようになってから、息子に対する言葉遣いやかかわり方も変わってきたよ」と言われました。

――日本では欧米に比べ、里親制度が普及していないと指摘されています。

◆普及するためには、「里親」という言葉が持つイメージを変えていく必要があるのではと感じます。子どもを預かる以上、責任はあります。ただ、無理に背伸びをしないといけないと感じてしまうと、一歩引いてしまう。「フレンドホーム」という名称も、そういう印象を和らげるために付けられたのかもしれません。子どもを預かることで、いい意味で背伸びをしてほしいけれど、し過ぎない。バランスが非常に難しいですが、国や行政には「里親」の印象を変えていく努力をしてほしいと思います。

普及にあたっては、子どもたちや里親に対する行政側のサポートをさらに充実させてほしいとも感じています。今以上に施設が安心して子どもを送り出せる、里親が不安を抱えず受け入れることができる体制を整えてほしいと思います。

僕たち夫婦がフレンドホームに取り組んでいることを知り、制度について妻に問い合わせてくれた俳優仲間もいます。欧米に比べ普及していないといっても、やりたいと思いながら二の足を踏んでいる方々も少なくないように思います。多くの人が「私もやってみたい」と手を挙げることができる社会に、ぜひなってほしいですね。

### 欧米に比べ普及遅れ

里親制度は、虐待などの理由により親元で暮らせなかったり、保護者がいなかったりする社会的な養育上の保護が必要な子どもたちを、家庭的な環境で育てる制度。社会的養護が必要な子どもは国内に約4万2000人いるが、大半が施設で暮らし、里親などによる家庭的な養育を受けるのは8000人程度にとどまる。海外では米国で約8割、英国約7割、ドイツやフランスで4割以上の子どもらが里親の養育を受けており、日本の里親への委託率は欧米に比べかなり低い。

児童福祉法に基づく国の里親制度には、実親の家庭に戻るか自立するまで預かる「養育里親」や、養子縁組を前提とした「養子縁組里親」、祖父母ら親族が育てる「親族里親」などがあり、国から里親に対し手当や教育費などが支給される。

国の制度とは別に、乳児院や児童養護施設の子どもらに家庭生活を経験してもらうため週末や夏休みなどに家で預かる「週末里親」「季節里親」と呼ばれる事業があり、主に自治体が運営。「フレンドホーム」の名称で東京都が実施している事業は1986年度から始まり、事業に登録する家庭は昨年12月現在で約400世帯にとどまる。



ともに　to mo ni
共生社会へ
未来をつくる SDGs

# 南極から温暖化読み解く

## 女性初の観測隊長・東大教授　原田尚美さん

未知の大陸として人類の好奇心を駆り立ててきた南極。今、オゾンホールや氷床融解など地球異変のセンサーとして注目を集める。日本が第1次南極地域観測隊（1956〜57年）を派遣してから約70年の歴史の中で、隊長に初めて女性が起用された。地球化学を専門とする原田尚美・東京大大気海洋研究所教授(57)で、12月に出発する第66次隊を率いる。気候変動や女性研究者の現状を語ってもらった。【聞き手・田中泰義】

――昨年は最も暑い1年となり、日本でも酷暑が日常になりました。

◆フィールド（野外調査）を約30年続けてきましたが、近年急激な変化が起きていると感じます。北極海では「海氷がほとんどない」と目を疑う場面に遭遇します。国連の気候変動に関する政府間パネル（IPCC）の報告書によると、この海氷が夏季に消滅するのは今世紀半ばと予測していますが、それより大幅に早まっても不思議ではないというのが観測の結果です。

一方、南極では、大陸からせり出している棚氷の底辺部は海水と接していますが、温かい海水の影響で解け始めています。すると、標高の高い内陸部にある巨大な氷河「氷床」が海の方向に押し寄せます。そこで温かくなった海水と触れ、さらに解けていくという悪循環に陥る可能性があります。南極の氷が全て解けると海面が数十㍍上昇すると予測されます。たとえそこまでの状況に達しなくても、南極の氷床融解がもたらす海面上昇は現実化しかねない恐怖を覚えます。私たち日本人だけでなく、多くの人々が沿岸部で生活しているだけに、この事態は軽視できる状況にはありません。

気候変動への懸念は、既に日ごろの生活にも出はじめています。私の大好きなサケは今季のみならず、海水温上昇のためか記録的な不漁が続いています。北海道の「新巻きサケ」や新潟の「塩引きサケ」を含め郷土料理など食文化への影響も懸念されます。夫と一緒に40代で始めた登山が趣味で、日本百名山のうち89座を登頂しました。幌尻岳（北海道）などの高山植物に心を癒やされました。気候変動による生態系破壊は、そんな機会を奪います。

グテレス国連事務総長の言う「地球沸騰化」を真剣に回避する必要があります。異常であることに慣れず、危機意識を維持することが肝要です。

――極地観測の意義が高まっています。

◆昭和基地は、東南極に位置し、1年を通じて周囲を厚い海氷に囲まれたアクセス困難な場所です。その結果、周辺1000㌔以内には通年の常設基地はなく、国際的に貴重な観測拠点として発展してきました。

地球の表面積の7割を占める海の温暖化現象の実態解明が重要になっています。今回の観測隊では、棚氷とその周辺環境の相互作用や私の研究テーマでもある海洋中の炭素をはじめとする物質循環やプランクトンなどの生態系について、昭和基地周辺を含む東南極の海域で調べます。異変の早期発見と社会への警鐘につなげられればと思います。

昭和基地から約1000㌔離れたドームふじ基地周辺で、約100万年前の氷を掘削する準備を進めています。氷に閉じ込められた気体の分析から過去の二酸化炭素濃度に加え、温暖だったか寒冷だったかを推計できます。気温上昇の原因は人間活動に伴う温室効果ガス排出だけではありません。地球と太陽の位置関係に伴う自然変動要因もあります。現代は40万年に1度と言われる暖かい時代が長く継続する「スーパー間氷期」です。100万年分の記録を入手すれば、現在の気温上昇のうち、人間活動と自然変動の寄与がそれぞれどの程度かを分析する手がかりになります。その成果は、効果的な対策に反映できます。

## 「ロールモデル」必要

――女性初の隊長としての抱負を教えてください。

◆初期の南極観測は、厳しい自然に向き合う探検の様相を呈し、いわゆる男社会でした。今もブリザードなど死に直面する厳しい世界ですが、基地の環境が整備され、女性を含め山岳経験のない多様な人材が参加できるようになりました。海外では約3割が女性と言われていますが、日本の観測隊も約1割を占めるまでになりました。多様性あふれた組織には活力や耐性があると思います。少数派の経験を生かし、小さな声に耳を傾け個々の能力が十分発揮できるよう尽力したいと思います。南極は有事に外からの緊急応援を得にくい場所だけに、隊員間の相互信頼は極めて重要です。

――何がきっかけで、理系女子である「リケジョ」の道に進みましたか。

◆理系を選択したのは、高校の化学で習った分子構造が面白かったためです。両親も「やりたい道に進め」と背中を押してくれました。東大の入学者も年々、女性の割合が高くなっていますが、今年度でまだ23%です。家族から「理系なんて」と反対されたという女子学生に接するので、周囲の影響が大きいのでしょう。「女性は理系に向かない」という固定観念を打破するにはロールモデルが必要です。私はその一人として、誰もが持っている「無意識のバイアス」について講演でよく話をします。

――育児や家事、研究活動の両立が難しいという声を聞きます。

◆私たちに子どもはいませんが、夫は理系だったこともあり、観測による長期不在を理解してくれているようです。日本でも男性の育休制度や、大学や企業に保育施設が整備されつつあります。問われるのは、女性が働きやすいようにと作られた制度が実際に活用しやすいかどうか。つまり、家族や組織で指導的立場にある人の意識です。

複雑な地球環境問題の解決には新しい視点も求められます。他にも少子高齢化、不安定な国際秩序など難題が山積しています。どの分野でも性別、人種、国籍を問わず、専門の枠を超えた人材が集まり、新たな提案をしなければなりません。次の時代を担う中高生ら若い世代には、この課題に取り組んでほしいですね。

＝藤井達也撮影

はらだ・なおみ　1967年、北海道生まれ。弘前大理学部卒業後、名古屋大大学院修了。海洋研究開発機構地球環境部門長などを経て2022年6月から現職。33次隊（91〜92年）に参加。60次隊（18〜19年）では女性初の副隊長を務めた。特技は書道で師範の資格を持つ。日本海洋学会副会長などの要職も務める。

## オゾンホール 世界初観測

原田さんが観測隊副隊長を務めた時の昭和基地＝2018年12月、本人撮影

日本の約37倍の広さを持つ白い大陸は長い間、人間の定住を拒んできた。しかし、1957年から2年間、各国が協力して気象や地磁気など地球上の現象について調べる「国際地球観測年（IGY）」の一環で本格化し、昭和基地は57年1月に開設された。

### 1957年開設 昭和基地

基地周辺は、厚い海氷に囲まれアクセスは困難だが、オーロラが頻繁に現れるなど観測の適地だった。69年以降、昭和基地周辺で大量の隕石が発見され、これまでに1万7000個以上を採取。世界トップ級の隕石保有国となった。82年には、上空のオゾン層が極端に減少する「オゾンホール」を世界で初めて観測した。

女性に門戸が開かれたのは87年で、29次隊の森永由紀さん（雪氷担当）が南極の夏の約3カ月活動する夏隊として採用された。10年後の39次隊では、厳冬期を含め1年以上活動する越冬隊員が誕生した。坂野井和代さん（オーロラ担当）と東野陽子さん（地震担当）である。原田尚美さんは60次の副隊長を経て、女性初の隊長就任となった。

隊員には研究者以外に調理担当やエンジニア、医師も選ばれるが、現在活動中の65次隊には、田端志野さんが女性初の発電機制御などを行う機械担当者として参加している。南極観測で中心的な役割を担う国立極地研究所（東京都）によると、これまでの隊員数は延べ3429人で、うち女性は133人。

## 廃食用油で空飛ぼう

1.5℃の約束

使用済みの食用油で航空機を飛ばす――。廃食用油を原料とする航空燃料（SAF）を製造する態勢作りが進んでいる。関連企業や団体の協力で原料の確保に向けた動きも加速し、2024年度中の供給を目指している。

SAFは従来の航空燃料に比べ、二酸化炭素（$CO_2$）の排出量を約80%削減することが可能とされ、政府は30年時点で国内航空会社による燃料使用量の10%をSAFに置き換える目標を掲げている。こうした中、プラント大手の日揮ホールディングス（HD）などが立ち上げた「FRY to FLY Project」には、外食チェーンや航空会社、自治体など、80を超える企業・団体が参画し、廃食用油の提供や周知に協力している。

若手経営者らでつくる公益社団法人・日本青年会議所も参画団体の一つ。昨年は全国14カ所の小学校で出張授業を行い＝写真、SAFや資源循環の必要性を訴えた。中心となって取り組んだ青森県八戸市の外舘友之さん(40)は「いらなくなったら捨てるのではなく、何かに使えるのではという意識を子どもたちに持ってもらいたかった」と話す。今年は全国の会員がそれぞれの地域の飲食店や商業施設などに廃食用油の提供を呼び掛ける計画だ。

生産準備も進む。日揮HDとコスモ石油などが22年に設立した合同会社「SAFFAIRE SKY ENERGY」（横浜市）は、堺市にある製油所内に国内初となる国産SAFの大規模生産プラントを建設中で、24年度中の生産・供給開始を目指す。同社の西村勇毅・最高執行責任者は「海外に輸出されたり、捨てられたりしていた廃食用油からできるだけ多くのSAFを生産し、国内の資源循環に貢献したい」と話す。【高木昭、写真も】

「ともに」の特設サイトはhttps://mainichi.jp/tomoni/